

北原白秋『フレップ・トリップ』のアイヌ表象*

阿武正英**
anno@smu.ac.kr

〈目次〉

- | | |
|----------------------|-------------------------|
| 1. はじめに | 4. 『フレップ・トリップ』のなかのアイヌ表象 |
| 2. 『フレップ・トリップ』をめぐる論点 | 5. おわりに |
| 3. 樺太・北海道にひそむ影 | |

主題語: 文化相対主義(Cultural relativism)、植民地主義(colonialism)、帝国主義(imperialism)、樺太(Sakhalin)、アイヌ民族(Ainu race)

1. はじめに

日本の近代詩人・北原白秋(1885~1942、以下白秋と略す)がアイヌ民族について詩歌や紀行文などで題材としていたことは意外と知られていない。白秋は関東大震災から約2年後の1925年8月7日から1ヶ月にわたる樺太・北海道旅行に参加する。その旅行がアイヌ民族を表現の対象にするきっかけとなった。当時40歳で、2年前の震災直前に6番目の詩集『水墨集』(1923)を刊行後、新たな展開を模索していた時期であったと思われる。

白秋は青年時代には約1ヶ月間与謝野寛、木下杢太郎、吉井勇、平野万里の4人と北九州・西九州旅行を行い、南蛮遺跡を訪ねている。1907年7月末から8月末までにわたる1ヶ月の道行きは紀行文『五足の靴』(1907)に記され、第1詩集『邪宗門』(1909)を生み出す契機となった。

同様に、樺太・北海道旅行も、いくつかの詩や短歌、紀行文などを生み出すきっかけとなった。詩では詩集『海豹と雲』(1929)のなかの『海豹と雲』の章と、童謡集『月と胡桃』(1929)

* 本論文は2012年度祥明大学校・校内研究費の支援によるものである。

** 祥明大学校 師範大学 日語教育科 助教授

1) その時の紀行文『フレップ・トリップ』について、白秋は「何らかの新体を樹てようと試みたものであった」(「後記」、アルス版『白秋全集』)と記しており、第2詩集『思ひ出』の「わが生ひたち」などと同じく、文体表現のレベルでは散文詩、叙事詩として捉えられる。

のなかの「イワンの村」や「お母さま」の章の詩篇などである。紀行文では『フレップ・トリップ』(1928)で樺太・北海道の体験が記されるが、樺太について多くが割かれている。北海道については『きよろろ鶯』にその一幕を写した「あはれ熊祭」が収められている。また、歌集では『海坂』のなかの「津軽海峡にて」に関連の歌が収められた。それらのなかから本稿では『フレップ・トリップ』を取り上げて、アイヌ民族がいかになら表象されているかを中心に論じることとする。

また、筆者はそれらの作品の時代背景として震災後から復興へ向う動きが、外への帝国主義的・植民地主義的な膨張、すなわち戦争へと向う動きが同時に進んでいたという点に留意しておきたい。その意味では『フレップ・トリップ』は震災後の作品であり、帝国主義的時流のなかで生まれた作品と言うこともできる。したがって、一時期領有した植民地・樺太と内国植民地・北海道の歴史について概観した上で、その文脈上に『フレップ・トリップ』を位置づけ、白秋の樺太・北海道旅行を通してアイヌ民族の表象がいかにならされているのかについて、考察することとする。

現在の日本は2年前の東日本大震災から復興へと進むなかで、韓国・中国との領土問題、日本軍の従軍慰安婦問題をめぐる議論、国内でのヘイトスピーチなど人種主義の顕在化、集団的自衛権の容認をめぐる憲法改正をめぐる議論などが続いていて、日本の右傾化が内外の識者から危ぶまれている。中野敏男が指摘するように、日本が過去の関東大震災後、復興の裏で戦争への道を歩んでいったことを鑑み、当時の震災後を考えることは現在の震災後の状況を見極める際にとっても参考になるだろう²⁾。そして、震災後に国民詩人の地位を確立していき、読者である民衆の考え方に影響を及ぼした白秋の言説を考察することは、現在及びこれからの文学の方向性を考えるうえでも意味のあることだと思う。

2. 『フレップ・トリップ』をめぐる論点

樺太・北海道旅行に関連する白秋の言説について、後世の評価は大きく2つに分れている。その旅行に関する作品として最も論じられることの多かった『フレップ・トリップ』を中心に概観を試みたいが、結論を先に言えば、文体面においては新たな文体実験として評価される一方、アイヌ民族をめぐる言説については帝国主義的として批判されている。

2) 中野敏男(2012)『詩歌と戦争—白秋と民衆、総力戦への道』NHK出版 pp.10-11 参照

まず、白秋の甥で詩人の山本太郎は当時の白秋の生活の安定をあげ、『フレップ・トリップ』の明るさの根拠の1つとしている。すなわち、1921年から25年にかけて、関東大震災で小田原の家が半壊したり、弟・鉄雄が経営する出版社アルス社が焼失するという災難があったが、妻・菊子との間に長男・隆太郎と長女・篁子が誕生し、家庭生活が安定しはじめた。そのような「生活環境の変化」が旅によって「解放された自由な詩心」とあいまって「未知の世界への弾んだ挑戦」と「新しい文体を試みようとする勢い」を呼び起こし「雄大な散文詩、叙事詩」として形象されたと指摘した³⁾。さらに、

思無邪こそ白秋天与の資質である。心をオープンに開き外光にくまなく身を晒し、眼に映る物象をあるがままに記録し、なお心に歌わせ、主客未分化のコンデンス状態をつくりあげる—それがこの紀行で試みた白秋の新文体だと僕は思う。

主客未分化は心理学上は幼児性心性のことだが、物の本質(実相)と無意識に、殆んど直接的にふれあう無垢の童心を詩歌の原素と信じた白秋にとり、よく視よく聴く大人の経験を透して主客未分化の世界を醸成してゆく『フレップ・トリップ』の文体実験は格別の意味を持っていたに違いないのだ。事実、『フレップ・トリップ』は彼の膨大な全遺業のなかでも特に澁刺とした異彩を放っており、本巻で接する(恐らく多くの)読者に“白秋新発見”と嘆じさせるほどの魅力を蔵しているはずだ⁴⁾。

と述べている。ここでは白秋が当時主張していた「童心」という考え方と「主客未分化」の「文体実験」を結びつけているが、「童心」は旅する白秋の未知なるものへの好奇心とも通じていよう。同じく詩人の飯島耕一は『フレップ・トリップ』には「幸せでエネルギーな白秋の音が充ち満ちている」「爆発的な歓喜の書」と言って、若々しく快活な面を高く評価している⁵⁾。今橋映子は山本太郎の見方を引き継いで、

モダニズム的技法を果敢に取り込み、「会話」の援用、スピード感など、明治以来の白秋散文では見たことのない躍動感が、全編にみなぎっている⁶⁾。

と評価した。そして「白秋の散文への実験」における「最後の成果」と位置づけている。

一方、白秋の言説を帝国主義的な言説として批判的な視点をいち早く提示したのは坪

3) 山本太郎(1982)『白秋めぐり』集英社 pp.213-222 参照

4) 山本太郎(1985)『『フレップ・トリップ』の文体—その躍動美について—』『白秋全集』19巻、岩波書店 p.391

5) 飯島耕一(1984)『北原白秋ノート』小沢書店 pp.122-124

6) 今橋映子(2004)「白秋散文の領界」『国文学 解釈と鑑賞』第69巻5号、至文堂 p.173

井秀人で、北海道などの内国植民地化の問題を、帝国日本に属する者、すなわち白秋らの視点を辿り直すことによって「日本人」たる自身を批評する場に向かわせることを目指した論考である⁷⁾。坪井は『フレップ・トリップ』の舞台・樺太の歴史的背景、すなわち樺太がロシア・ソ連 / 日本2国間の国家バランスに翻弄された地域であることなどに触れた上で、作品に現れるアイヌ民族や先住民の人々を帝国日本によって「土人」として「保護」され、辺境へと追いやられ封じ込められたマイノリティーとして<野蛮>なるものの表象として捉えられていたと分析し、次のように語る。

朝鮮総督が使った特等室に泊って<支那服>を着た詩人北原白秋が北側の植民地を<観光>する旅の記録。それが『フレップ・トリップ』なのだ。豪華なツアーは冒険譚を模倣しつつ、冒険にはなり得ない。この旅では幌内河畔でオロチョンやニヴヒの少数民族の人々に接し、彼らを<無智>で不潔な存在として<憐憫>の対象にしているが、樺太アイヌに接したのはわずかに多蘭泊を通過する車窓からアイヌの村を見たというのに過ぎない⁸⁾。

このように坪井は『フレップ・トリップ』のなかの多蘭泊で見たアイヌ村の情景描写を重要視していない。また、山本太郎の文体への評価に対して「植民地主義のイロニーに対する植民地主義(者)の鈍感さを引き替えに成り立っている」として痛烈に批判するのである。

そのようにこの作品を豊かな内地の詩人白秋が貧しく<野蛮>な辺境の植民地の先住民を差別的にまなざすという図式から捉える読みは、細見和之の「好奇心とオリエンタリズム—北原白秋のアイヌ民族へのまなざしを考える⁹⁾」のうちにも表れている。細見は「あまりに尊大で独善にまみれた作品」「惨憺たるもの」「全開の好奇心に対応すべきはずの他者経験というものが、本質的に欠落している」「あの時代の(あの時代だけだろうか)「内地人」一般の、他者経験の乏しさを象徴している」というように、白秋の好奇心のうちに潜む他者経験の欠如を繰り返し批判する。

中野敏男は「敷香¹⁰⁾」という白秋の詩を取り上げて、ロシア人が樺太で無籍となって残っ

7) 坪井秀人(2002)「表象としての植民地」『岩波講座 近代日本の文化史5 編成されるナショナルリズム』岩波書店、pp.271-309

8) 坪井秀人(2002)、上掲書、p.301

9) 細見和之(2007)「好奇心とオリエンタリズム—北原白秋のアイヌ民族へのまなざしを考える」『異郷の死—知里幸恵、そのまわり』人文書院、pp.253-287

10) 「北から北から泣いて来た / 子供は窓から目を出して / ろしあの子供はかまはいさう。 / 子供をつれつれ逃げてきた / ろしあの母さんさびしさう。 / やつと一匹ついて来た / ろしあの牡牛もひもじさう。 / ちひさな向日葵見てゐるし。 / 母さん、はだしで、乳売りに、ちらちら耳輪に日が照るし。 / 牡牛は海 見て、ねころんで、 / ぼんぼん爪草たべてるし。 / 土人はオロチョン、ギリヤク、 /

たり、流れ込んできたりして生活している姿を同情的に描きながら、先住民の姿とともに描き出していることを指摘し、次のように述べる。

…自分の生活感覚の高みから見下す人種主義の色合いを帯びていることは明らかでしょう。というよりこれは、「文明」による統治の対象として「遅れた原住民」に問題を見出す植民地統治者の支配意識なのだとやった方がいいかもしれません。…少なくともここに帝国主義の一端が見えるのは間違いありません¹¹⁾。

これは『フレップ・トリップ』のアイヌ民族の描写にも言えることである。しかし、中野は同時代のアイヌ民族を含む先住民に対する帝国主義的、かつ人種主義的な蔑視が白秋に限らず、平均的な日本人に当てはまる感覚であることを大手新聞の記事を通して指摘した上で、先の坪井や細見とは少し異なり、白秋をやや評価する立場を表明している。

大手新聞さえそんな認識を示す言語状況を考えるなら、白秋の語りはむしろ北方民族に同情的であるとも言え、紀行文『フレップ・トリップ』では、植民者日本人の側の狡猾な差別的態度や傲慢な権威的態度についてしっかり批判的に語っていることも見逃すことはできません¹²⁾。

先の坪井の論も白秋のアイヌ民族に対する言説が岩野泡鳴のものに比べればあからさまな蔑視を含むものではないことを示していたが、中野は白秋の言説をさらに広く同時代の言説のうちに置くことで、相対的に評価しているもので注目しておきたい。

他方、川本三郎の『白秋望景』は旅先で出会ったロシア人のイワン少年とセーニャという少女との出会いに触れ、

無論、樺太には厳しい現実がある。アイヌやギリヤークなど少数民族の問題がある。明治43年(1910)の日韓併合によって労働者として連れてこられた朝鮮人の悲劇がある。白秋はそれにあえてふれようとしない。感覚の人は、ただ北の地に「極楽園」を見ようとする。童話作者の目で樺太を見ようとする。『フレップ・トリップ』は一篇のメルヘンと呼んでいいかもしれない¹³⁾。

お魚ばかり干してるし」(Ⓔ354-355)

11) 中野敏男(2012)、前掲書、p.175

12) 中野敏男(2012)、前掲書、p.295

13) 川本三郎(2012)『白秋望景』新書社、p.314

と言う。日本近代史の暗部から目をそらし、「童謡の製作に最も熱中した時期」の白秋の面影をどのように評価しているのかは見えてこないが、このような見方も坪井や細見らの立場からすれば、植民地主義を無邪気に容認する見方として厳しく退けられるであろう。もとよりこの種の政治的な事柄に対して直接的な発言をすることのなかった白秋であるが、「童心」は無邪気を装って、被支配民族の苦難に深く立ち入ることなく、夢のように明るい幻想世界を創造しようとしていたと言えるかもしれない。

以上、『フレップ・トリップ』を中心に、先行研究を概観してきたが、樺太・北海道をめぐる白秋の言説に対する評価は、主に文体実験と関連づけて評価する立場と、帝国主義的視点として批判する立場に対照的に分れている。そのような賛否両論の評価史を押さえた上で、樺太・北海道の歴史的文脈について触れておくことにする。

3. 樺太・北海道旅行にひそむ影

『フレップ・トリップ』には樺太を舞台にアイヌ、オロチョン、ニヴヒなどの先住民族やロシア人などが登場するが、彼らはロシア(ソ連)と日本の間で翻弄されていた。

樺太は前近代¹⁴⁾から日本人、ロシア人と先住民族たちの混住の地で、1855年の日露和親条約で国境が定められなかったので、日露間で係争があった。明治維新後の1875年、樺太・千島交換条約が結ばれ、樺太は千島列島とひきかえにロシア領となり、日本政府は樺太や千島に住んでいたアイヌの人たちを北海道や色丹島に強制移住させた。移住させられた人たちは生活の変化や病気の流行などに苦しみ、多くの人が亡くなった。

日露戦争後の1905年、ロシアとのポーツマス条約で、北緯50度を境に樺太の南半分は日本領になり、国境が定められた。ところが、17年のロシア革命に干渉して日本軍のシベリア出兵が行われ、北樺太や大陸の沿海州、さらにはバイカル地域まで軍事行動を展開し、駐留を続ける。22年にシベリアから撤兵したが、北樺太に駐留を続けた。25年1月の日ソ基本条約で、ようやく日本軍は北樺太から撤収して、内政への相互不干渉と外交関係の樹立へと向かった。これによって日本は、南樺太の新領土と沿海州沿岸での漁業権をあらためて保全し、北樺太では天然資源の利権を獲得したが、長期にわたる戦費の支出と3500名もの戦死者を出し、「日本帝国主義最初の重大な敗北¹⁵⁾」と言われている。白秋が観光団の一

14) 本稿では明治維新(1868)以前を前近代、それ以降を近代とする。

員として樺太を訪問するのはその条約が結ばれてから7ヶ月後のことで、新しく設けられた国境を直接見学するコースも含まれていた。

ところで、白秋の樺太観光に先立つ8月5日に当時摂政であった後の昭和天皇が訪問していた。すでにその内容については坪井秀人と中野敏男がそれぞれの観点から論じている¹⁶⁾。中野は日本の地方へと向かう白秋の旅が、植民地と勢力圏の拡大を目指して進んでいた大日本帝国の歩みと実際の旅程において重なり合っていた点に注目している¹⁷⁾。さらに、両者の旅行の意味について近接性を見出し、摂政の旅が、日本帝国の植民地的境界にまで来てその地をしっかりと支配下に統合すべく武威を他者に顕示しようとする意図を抱えていたのだとすれば、白秋の旅もまた、日本の地方の果てに立ってその地とそこに住む人々を自らの詩想の圏内に捉えようとするものであったからであると分析している¹⁸⁾。

『フレップ・トリップ』のなかにも摂政訪問に関する祭りや行事を終えた後の様子などが描かれている。一例をあげれば、白秋は「イワンの家」といわれるロシア系のパン屋を営む住民の家を訪問するが、そこに天皇と皇后の写真と一緒にロシアのニコライ皇帝と皇后の写真が飾られていた。坪井によれば「ロシア人らが恭順を示す一種のアリバイ証明として≪遼陽占領奥軍大奮闘の図≫や<御真影>が飾られたことを推測させる¹⁹⁾」という。つまり、このような情景も、日本の摂政訪問と無関係ではなかったと思われるし、樺太住民が日露間で翻弄されたことを表している。

一方、北海道は見方によれば日本の内国植民地として強制的に転化された地域である。前近代から先住民のアイヌ民族はアイヌ・モシリ(アイヌ語で北海道の呼称)の多数派として狩猟と漁業を基本として独自の文化をつくりだし、本州の東北地方や北方アジアの諸地域と交流していた。中世においては鎌倉幕府の流刑地とされ、近世から江戸幕府に松前藩がアイヌとの交易独占を保証されるようになってから、いわゆる和人(後の多数派日本人)のことで、アイヌ民族と並べて呼ぶときの呼称)とアイヌというはっきりした区別がされるようになった。そして明治維新、すなわち日本近代の幕開けにともない、1869年、政府は旧呼称であった「蝦夷地」を「北海道」と改め、一方的に日本の一部として本格的な統治と開拓に乗り出した。同年、北海道の開拓を進めるために開拓使を設置し、アイヌ民族の戸籍作

15) 松尾尊兌(1978)「シベリア出兵」、『日本近現代史辞典』東洋経済新報社、中野敏男(2012)、前掲書、p.168より再引用。

16) 坪井秀人(2002)、前掲書、pp.302-303、中野敏男(2012)、前掲書、pp.166-170

17) 中野敏男(2012)、前掲書、p.167

18) 中野敏男(2012)、前掲書、p.170 参照

19) 坪井秀人(2002)、前掲書、p.303

成も行って、正式に日本の国民に組み込んだのである。

しかし、それはアイヌ民族にとっての幸福を意味しなかった。開拓使は近代的な土地制度を導入し、山林や川などアイヌ民族が狩猟や採集などに利用してきた土地は、それが居住地であっても官有地として国の財産として、和人に払い下げられた。こうして、広大な土地が私有地化され、アイヌ民族は生活の場を奪われていった。また、鮭や鹿の加工品を北海道の産品にするため、アイヌ民族が行っていた鮭漁や鹿猟を禁止し、生活は困難になった。

さらに、日本政府はアイヌ民族を「旧土人」と規定し、和人とは差別し続けた。そのような仕打のもととなったのが、1899年に制定された「北海道旧土人保護法」で、アイヌ民族を保護するという名目を取りながら、アイヌ民族の農耕民化と、伝統的なアイヌ文化を否定する教育がなされた。たとえば成人のしるしとされた女性の入れ墨や男性の耳飾りなどの伝統的な風習を非文明的と見て、アイヌ民族の言語や生活習慣を事実上禁じた。さらに日本人風の名前を名乗らせ、日本語の使用を強制するなどの同化政策を行い、和風化、さらには皇民化へと促していった。この国家主義的な悪法は1997年にアイヌ文化振興法が制定されるまで残されたのである。

当時のアイヌ民族の苦難を伝える資料として、金田一京助がアイヌ民族の山辺安之助の半生を聞き取って記した『あいぬ物語』(1913)がある。そのなかには山辺が千島・樺太交換条約で北海道に強制移住させられたところから始まり、日露戦争では日本軍に従軍し、戦後は樺太に戻って「土人学校」の建設に関わり、国家的なプロジェクトであった南極探検に樺太犬を寄付して参加するなどといった内容が綴られている。それは「土民」を脱して「皇民」への同化へと演じていかざるをえなかったマイノリティーの人々の悲劇と解される²⁰⁾。

翻って1925年の夏、内地の人・白秋が樺太・北海道旅行に行くことになったのは、親しい歌人・吉植庄亮からの勧誘が直接のきっかけであった。鉄道省(のちの国鉄、現在のJR)が主催した樺太観光団による旅行で、白秋にとっては1914年の小笠原渡海以来の境界地域への大旅行である。

白秋を含む総勢348名は8月7日、高麗丸という3千28トンの客船で、横浜港から出発し、北海道の小樽を経由して、樺太に渡り、国境安別、真岡、本斗、豊原、大泊、敷香、海豹島を訪問した。そして、オホーツク海を南下して再び北海道に戻り、稚内、旭川、札幌、函館を経て当別を訪問した。開発途上の樺太や海豹島の壮観を見てもらおうという趣旨の

20) 坪内秀人(2002)、前掲書、p.297 参照

旅行で、1等船客は富裕層が多く、牧畜家、材木業者など視察を目的に参加した人たちもいた。吉植の顔利きで白秋は2等室の船代110円で、最上の特等室の利用を許された。高麗丸は直前まで関釜連絡船として使用されていたものであり、彼らの特等室は「談話室と寝室と便器付きの広い浴室と、3室続きの豪華なもの」で、かつて朝鮮総督の使用した部屋であったという。

先に触れたように、和人によって土地や生活手段を限定され、文化まで奪われてしまったアイヌ民族の立場からすれば、それは狡猾で傍若無人、厚顔無恥な和人の贅沢旅行と映ったに違いあるまい。

『フレップ・トリップ』の冒頭は出航の喜びが次のように綴られている。

心は安く、気はかろし、
揺れ揺れ、帆綱よ、空高く……

おそらく心からの微笑が私の満面を揺り耀かしてみたことと思ふ。私は私の背後に太いロップや金具の緩く緩くきしめく音を絶えず感じながら、その船首に近い右舷の欄干にゆつたりと腕をもたせかけてゐる。

見ろ、組み合わせた2つのスリッパまでが踊つてゐる。金文字入りの黒い革緒のスリッパが。

心は安く、気はかろし、
揺れ揺れ、帆綱よ、空高く……

私の今度の航海は必ずしも物の哀れの歌枕でも世の寂寥を追ひ求むる風狂子のそれでもなかつた。ただ、未だ見ぬ北方の煙霞に身も霊もうちこんで見たかつたのである。殆ど境涯的にまで、思無邪の旅ごころを飽満さしたかつたのだ。(1911-12)

船上で「金文字入りの黒い革緒のスリッパ」をはき、得意満面の白秋の様子が思い浮かぶだろう。そこには未知の北の境界地域のクルージングを無邪気に享受することへの期待感があふれているだけである。そして、冒頭に限らず全編を通して、和人とアイヌ民族の間に横たわる樺太・北海道の歴史、すなわち侵略・収奪の加害の歴史に対する贖罪意識のかけらも見られない。その先には、自身を含む和人が虐げ貶めたアイヌ民族に対して好奇の目を向け、上から視線で蔑む、当時の内地の旅行者の姿が想起できよう。

4. 『フレップ・トリップ』のなかのアイヌ表象

『フレップ・トリップ』のなかで、アイヌ民族に関する記述が最も表れるのは「多蘭泊」の章である。樺太西海岸を国境安別、真岡から汽車で南下しながら、アイヌ村のある多蘭泊でアイヌが見出される。先に述べたように、坪井秀人は「樺太アイヌに接したのはわずかに多蘭泊を通過する車窓からアイヌの村を見たに過ぎない²¹⁾」として、その場面に深い関心を払わなかったが、本稿では光を当ててみたい。

ぞろぞろと汽車から下りる、またプラツトフオムを駈けて来る。茄子とトマトの籠、赤ん坊の目、目、頭、帯、々、足。違ふ違ふ。顔色が違ふ。眉の毛の深い女、娘、廂髪。

「アイヌだ。」

「アイヌだ。」

「や、なある、これはよろしいね、なかなかの別嬪やないか。毛深うおまん、へへん。」

「Nさん、本斗がありますよ。」

「そやかて、待ちなはれ。へへん。」

(中略)

汽車が駛る。駛る、駛る。

アイヌ、まことにアイヌの村にちがひない。彼等はまつたくアイヌだと、私は観た。

アイヌは、アエオイナ神、別名アイヌ・ラク・グル(アイヌの臭ひのある人)に依つて創造された祖先の末裔だと自身に彼等を思つてゐる。アイヌは繁縷^{はこべ}で頭を、土で身体を、柳で背骨を創られた。とまたいはれてゐる。アイヌの眼高は深い。頭髪が深い。神々の髪の毛の人として彼等はその美髪を矜つてゐる。彼等は古伝神オキクルミ^{オイナカムイ}を矜る、その蝦夷島^{アイヌモシリ}の神を。

アイヌは白哲人種であらうか。だが、かの人種の皮膚は銅色がちの鶯色だとジョンバチュラー氏はいつた。私はそれを信じよう。

何とあの彼等及び彼女らの髪の毛の濃く眉の濃く髭の濃いことであらう。(中略)

…それらの家屋も絵葉書などで見る北海道の伝統的家屋とは殆ど趣を異にしてゐる。あまりに日本化してゐる。日本化したと云へ、それは日本の乞食の住居のやうな陋屋がいかにも多く見られたのである。

だが、アイヌである。人種は確かにアイヌである。だが彼等の服装は浴衣がけである。シャツにズボンである。浅ましいのはまた乞食同然の風俗もしてゐる。

21) 坪井秀人(2002)、上掲書、p.301

が、紅葵の傍、向日葵の花叢の中、または戸毎の入口の前、背戸の外に出て、子供まじりに、毛深い男女のぽつんぽつんと佇んでゐる姿を見ると、人種の血肉は争はれないものだと観た。日本人の私なぞには通ぜぬ深い何かがある。アイヌのさうした哀愁はまた何から来る。(19 141-142)

まず多蘭泊のプラットホームで和人の相貌とは異なるアイヌ女性に男性観光客の性的な視線が向けられるが、白秋はその浮いた会話に口を挟まずに、アイヌの一般的な紹介に入り、アイヌ村の風景描写へと移っていく。その場面について、細見和之は次のように批判する。

軽薄きわまりない観光団の傍らで、アイヌ民族と文化について自分の内面で蘊蓄を傾けている白秋——これはこれでいやらしい構図であるが、そもそもこのとってつけたような蘊蓄は他の観光団の態度と異なっただれほどの内実を付与できているだろうか²²⁾。

つまり、細見は白秋のアイヌを紹介する記述を「とってつけたような蘊蓄」とし、文脈から「軽薄きわまりない観光団」と対置して「いやらしい構図」だと言って、俗物として描かれる観光客と同一レベルであると見なす。そして、「日本人の私なぞには通ぜぬ深い何かがある。アイヌのそうした哀愁は何から来る」という白秋の問いに対しても、「とってつけたような感慨」としか響かないと言う。すぐ後のアイヌ長老たちが空を舞う1羽の鷺を見つめる場面も、「さすがに当代を代表する文人のものと思えないわけではないが、「手慣れた白秋の技量のうちという気がしてならない」と観る。その鷺と関わる場面について、細見はさほど重要視していないが、筆者は白秋のアイヌへの観方が反転する重要な個所であると考えており、以下引用しておく。

おお、みんなが今空を見上げてゐる。

おお、また所謂アイヌ模様の厚司を着た爺がある。ある、ある。2人も3人もある。

何と、かの爺どもの胡麻塩の蓬々と乱れて深い渦巻きをした髪の毛、凹んだ黒い両眼に蔽ひさがつた眉毛、口髭、毛むくじやらの胸まで長々と垂れた鬚だらう。何と荘厳な顔貌と威厳のある風采の持主で彼等はあるであらう。

あ、トルストイがある。トルストイがある。

おや、あの爺どもも空を仰いだ。

22) 細見和之(2007)、前掲書、p.265

と、

「鷺だツ」と、誰かが窓から見あげた。

はつと仰ぐと、アイヌ部落の、そのややうち開けた谿谷の上、海に迫つた丘陵の榎松の黒い疎林の、その真つ蒼な空に一点、颯爽と羽風を切つてゐるのは、

あ、たしかに鷺だ。

鷺は飛ぶ。飄としてまた流れて、翼を撓めて、あ、大きく張つた。

向うところは鞆鞆の黒い遙かな大うねりの波濤の彼方である。

鷹ひとつ見つけてうれし伊良古崎 芭蕉

これだなと私は思つた。

あ、アイヌが先刻から見あげてゐたのは、あ、これだつたか。

青い青い空ではある。(⑩142-144)

ここで白秋はアイヌの老人を「莊嚴な顔貌と威嚴のある風采の持主」として、「トルストイ」に擬する。トルストイは当時の日本の文人にとつても、尊敬を集める文豪であつた。つまり、アイヌの風貌に対して最大限の称賛を送つたと見てよいが、続いて現われる「鷺」の姿も何者にも束縛されず青空を悠々と舞う矜り高きアイヌの莊嚴な姿に通じていよう。「鷺」の姿はアイヌのあるべき姿を無意識裡に連想させ得る。実際、白秋はアイヌと鷺を詩篇「老いしアイヌの歌」のなかで結びつけているのである²³⁾。すぐ前の場面では、日本化され、しかも「乞食」のような住居に住み、日本式の浴衣やシャツにズボンの「乞食」のような風俗と言つて露骨なほどに辛辣に捉えて、「日本人の私なぞに通ぜぬ深い何か」を感じ、アイヌの人々を絶対的な他者として心を閉ざした。それが、この場面では「アイヌ模様の厚司を着た爺」が現われ、アイヌ民族という他者への尊敬の念が生じる。それゆえに、白秋は「鷺を見つけてから、私の心は閑かになつた」(⑩145)というように、青空を颯爽と飛ぶ「鷺」を矜り高きアイヌ民族の姿と二重写しに見出してから、心に落ち着きを得る。

つまり、白秋はアイヌ民族が日本(人)化された姿よりも、本来の民族の伝統的な姿を「莊

23) 詩の後半部分に「彼アイヌ / 老いたる鷺。 / ^{アイヌモシリ}蝦夷島の神、 / 古伝神、 / オキクルミの裔。 / ほろびゆく生ける屍 / 光り、かつ白き屍。 / 彼、アイヌ、眉毛かがやき、 / 白き髭胸にかき垂り、 / ^{いつ}嚴かしきアツシシ、 / マキリ持ち、研ぎ、あぐらゐ、 / ^{くぼ}真夏なす眼の窩のアイヌ、 / 今は善し、 / オンコ(引用者注：水松)削ると / ^{いきなが}息長に息吹き沈み、 / ^{いぶ}枕れ、遊び、心足らふと、 / そのオンコ、 / たりたりと削りけるかも」(「老いしアイヌの歌」下線部引用者、⑤167-168)と描かれている。

厳なものとして作中に立ち上げたのである。これはアイヌ文化を否定しながら日本化しようとする人種主義や植民地主義とは一線を画すると言っていいだろう。『海豹と雲』の詩のなかにいくつものアイヌ語がカタカナ表記で表れるが、その成否はともあれ、白秋はアイヌの土地と人をアイヌ語で描こうとした点は評価できる²⁴⁾。しかし、その根本理念は次のように国家主義的な傾向を帯びたものであった。

わたくしは、かの日本紀、風土記、祝詞等を渺遠にして漠漠たる風雲の上より呼び戻して、切に古代人の復活を祈り、之に近代の照明と整齐とを熱求しつつある。わたくしは日本民族の1人として、容易にかの泰西流行の思想に同ずることを潔しとせぬ。(5241)

このような当時の白秋の「古代」志向と日本主義的な傾向から、失われた日本の原像をアイヌ民族の相貌や生活から見いだそうとし、「荘厳な」アイヌ民族と「日本民族」の古代人の姿を重ね合わせようとしていたことについては、すでに拙稿で論じた²⁵⁾。そこにも植民地主義的な危うさが内在していて、国民詩人としての道を進もうとしていた白秋が当時の体制側の帝国主義や国家主義の時流に乗っていたことについては疑いの余地はなく、その点は十分批判されるべきである。しかし一方で、わずかではあるが、アイヌ民族を文化相対主義的に捉えて描き出し、他者として尊重しようとする立場に立ち得たことについては評価されてもよいのではないだろうか。この点は坪井秀人、細見和彦、中野敏男にはすくい上げられなかった白秋の美点であったと言えよう。周知のように、当時朝鮮の民謡や詩を日本で紹介した金素雲を(それは自ら日本語に翻訳したものであったが)白秋が高く評価し、『朝鮮民謡集』(1929)や『朝鮮詩集』(1940)の出版に援助を惜しまなかったのも、異文化への好奇心と理解心、尊敬心とともに他者への寛容性を示している。

24) 坪井秀人(2002)は前掲書のなかで「泡鳴それに白秋ら内地から訪れた詩人らの散文や詩の日本語に標準化された音律と文字は、日本語やローマ字の文字に仮象したそうした<声>に反応することを装いつつも、暴力的に消し去るか、自らの日本語＝国語の階調に、その和声感を引き立てるべく(まさにエキゾティシズムよろしく)吸収していったのである」(p.298)と批判的に捉えている。筆者は拙稿(2005)「北原白秋『海豹と雲』における「古代」へのアプローチ」(『日本学報』第65集2巻, pp.424-427)のなかで『海豹と雲』の詩について論じている。

25) 拙稿(2005)、上掲論文、pp.424-427

5. おわりに

細見和之は白秋を佐藤春夫とともに「想像力を介した異文化体験の可能性を体現していた」と言い、次のように語る。

それは学問的関心やもっと日常的な好奇心というものが、たんなる支配の道具と化すことなく、あるいはほとんど支配の道具のひとつでありながら、それでも他なるものにどのように打ち開かれるかという、私たちの研究にとって、あるいは表現にとって、とても大事なポイントだろう²⁶⁾。

その意味で私見ではあるが、先に取り上げた『フレップ・トリップ』のなかの「荘厳」なアイヌ民族の描写は、私たちのアイヌ民族への学問的関心や他者への好奇心がいかにか他者へと打ち開かれるかという点において、示唆に富んでいると思う。まさに「想像力を介した異文化体験の可能性を体現」している好個の例だろう。しかし、『海豹と雲』などアイヌ語をカタカナで組み込んだ詩篇においては、『フレップ・トリップ』のあの場面のように成功したとは思えない。つまり、白秋は震災後の国家主義の風潮にのる形で体制側の国家神道の思想の枠に合わせて詩を創作したので、表現の可能性を自ら枯らしてしまったのである。その後、国民詩人となっていく白秋は戦争へ進む日本を鼓舞するプロパガンダ詩や愛国詩を出すほどに退化していくのである。

ともかく、『フレップ・トリップ』が書かれた当時の白秋にとっては、詩という表現空間よりも、紀行文という自由な枠組みの方が表現しやすかったのではないだろうか。そのうちのアイヌ表象の一部は文化相対主義的で、人種主義や植民地主義とは性格の異なる良質の異文化体験の可能性を示していた。皮肉なことに、詩人白秋はアイヌ民族に対する詩的表象においては、詩よりも紀行文の方が価値ある成果を収めたのである。

【参考文献】

阿部一司他8名編著(2008)『アイヌ民族：歴史と現在-未来を共に生きるために<改訂版>』公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構

26) 細見和之(2007)、前掲書、p.277

阿武正英(2012)『北原白秋 近代と伝統』人文社

_____ (2005)「北原白秋『海豹と雲』における「古代」へのアプローチ」『日本学報』第65集2巻

飯島耕一(1984)『北原白秋ノート』小沢書店

今橋映子(2004)「白秋散文の領界」『国文学 解釈と鑑賞』第69巻5号、至文堂

川本三郎(2012)『白秋望景』新書社

北原白秋(1988)『白秋全集』別巻、岩波書店

財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構(2006)『アイヌの人たちとともに—その歴史と文化』財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構

田村貞雄(1992)「内国植民地としての北海道」、大江志野乃夫他7名『岩波講座 近代日本と植民地 1 植民地 帝国日本』岩波書店

坪井秀人(2002)「表象としての植民地」『岩波講座 近代日本の文化史5 編成されるナショナリズム』岩波書店

中野敏男(2012)『詩歌と戦争-白秋と民衆、総力戦への「道」』NHK出版

東村岳史(2006)『戦後期アイヌ民族-和人関係史 序説1940年代後半から1960年代後半まで』三元社

細見和之(2007)「好奇心とオリエンタリズム—北原白秋のアイヌ民族へのまなざしを考える」『異郷の死—知里幸恵、そのまわり』人文書院

山本太郎(1982)『白秋めぐり』集英社

_____ (1985)『『フレップ・トリップ』の文体—その躍動美について—』、『白秋全集』19巻、岩波書店

* 北原白秋のテキストは岩波書店版『白秋全集』(1984~88)に拠った。引用に際して、巻数とページを()へ順に記した。例えば3巻12ページの場合(③12)とし、4巻12~13ページの場合(④12-13)のように記した。

논문투고일 : 2013년 09월 10일
심사개시일 : 2013년 09월 20일
1차 수정일 : 2013년 10월 09일
2차 수정일 : 2013년 10월 16일
게재확정일 : 2013년 10월 21일

〈要旨〉

北原白秋『フレップ・トリップ』のアイヌ表象

北原白秋は関東大震災後に樺太・北海道旅行に行き、『フレップ・トリップ』という紀行文を書いた。その紀行文のなかで、アイヌ民族が描かれるが、近年の研究では帝国主義・植民地主義批判の立場から厳しく批判されてきた。当時、白秋が国家主義の時流に乗っていたことについては疑いの余地はなく、その点は十分批判されるべきである。しかし一方で、『フレップ・トリップ』のアイヌ表象の一部はアイヌ民族を文化相対主義的に捉えて描き出し、他者として尊重しようとする立場に立ち得ており、評価してもよいのではないだろうか。それは、人種主義や植民地主義とは性格の異なる良質の異文化体験の可能性を示していた。皮肉なことに、詩人白秋はアイヌ民族に対する詩的表象においては、詩よりも紀行文の方で価値ある成果を収めたのである。

Ainu representation of “Frep trip” by Hakushu Kitahara

Hakushu Kitahara went for trip to Sakhalin, Hokkaido after the Great Kanto Earthquake and wrote the book of travel called “Frep Trip”. In the book of travel, Ainu race was drawn, but has been criticized strictly by researchers from the situation of imperialism, the colonialism criticism. There is no room for the doubt about what white Hakyusy was carried on in the current of the times of the nationalism, and the point should be criticized enough. However, on the other hand, I think Hakyusy catch Ainu race for cultural relativism and draw it and may evaluate that he was able to stand in the situation that he is going to respect as others. It showed the possibility of the high quality cross-cultural experience that was different from racism and the colonialism in the character. Ironically, the poet Hakushu Kitahara gained valuable result in the book of travel than poetry in the poetic representation for the Ainu race.